

## 鉄ちゃんへ

宮崎県 宮崎大学教育文化学部附属中学校 中学3年  
坂元 遼太郎（さかもと りょうたろう）

ヒサちゃんが亡くなったので鉄ちゃんは一人ぼっちになった。ヒサちゃんは享年七十八歳、鉄ちゃんの奥さんで優しい人だった。鉄ちゃんは僕の祖母の弟で母の叔父にあたる。母とは親子のように仲が良く僕は孫のような存在だ。本来ならば鉄三おじいちゃんとかヒサおばあちゃんとでも呼ぶのだろうが、子供の頃から鉄ちゃんヒサちゃんと呼んでいる。

鉄ちゃんは老後を生まれた町で過ごすために、東京で自営していた工場を弟に譲りヒサちゃんと二人で海辺の町に帰ってきた。毎日、漁師のように潮と天気を気にして釣り糸を垂れ、食べる分だけ釣れると帰ってくるという暮らしをしている。鉄ちゃんの家大きなガレージの上には梯子で登っていく秘密基地のような小部屋があり、そこには大切にしている釣り竿と、鉄ちゃんの手作りのルアーと、それらの道具で釣りあげた八十センチもある平目や二メートル以上のハモの魚拓が壁に貼ってある。僕は鉄ちゃんの家遊びに行く度に、その魚拓の大きさに感心し、鉄ちゃんが格闘した海へ思いを馳せる。それから、ルアーを見せてもらい、中に鉛を仕込む構造やうろこの貼り方、塗装の仕方などを教わる。鉄ちゃんは天才的にもものづくりの上手い人で、そのルアーは水に入れて引くと、どれも生きている小魚のように泳ぐのだ。

「好きなのを欲しいだけ持ってっていいよ。」

と鉄ちゃんは言う。そんな時は決まって隣からヒサちゃんが「遼くん、遠慮しなくていいのよ。いっぱいもらって行きなさい。鉄三さんはまた木切れからいくらでも作るんだから。」

とバルサ材をさしながら言ってくれたものだ。僕は嬉しくて、でも調子に乗らない程度に気に入ったルアーを数個頂く。その嬉しい気持ちといったら何にたとえられるだろう。

五月の晴れた日には、潮干狩りに一緒に行って貝の取り方を教えてくれた。貝を見つけるコツは貝の呼吸する穴を探すことである。波がさらって平らになった砂浜にわずかだが小さなへこみが見えるのだ。僕は全く見つけられない母さんを横目に鉄ちゃんと同じくらいその穴を見つけることができたので、大きなあさりをたくさん掘り当てた。鉄ちゃんは「心の目で見らんといかんからな、遼くんには見えるんだなあ。さすがだなあ。」

と日に焼けた顔をくしゃくしゃにほころばせて褒めてくれた。僕とはおじいち

ゃん程に歳が離れているけれど、心はハックルベリーのような人なのだ。僕はそんな鉄ちゃんをととても尊敬している。

一人になった鉄ちゃんのために何をすべきなのだろう。鉄ちゃんはみんなの前では元気であるけれど、皆が帰るとヒサちゃんの残した宅配便の文字などを見ても涙が出るのだと祖母が言った。いつも優しくしてもらっているのに、僕にはかける言葉も無かった。

葬式の時、親戚がいる中で鉄ちゃんが僕に「受験や部活で忙しいのにすまんね。」

と言った。僕はこんな大人のあつまりで直接お礼を言われて言葉に詰まった。

「いえ、ヒサちゃんは僕にとって、とても身近な人だったので。」

と頭を下げながらやっと言うと祖母が

「まあ、なんて優しい言い方をするんやろねこの子は。」

と言った。そうかな、僕はいつだってそう思っている。むしろたどたどしくて慰めの言葉にもならないと思ったのに。その時、僕がこれから鉄ちゃんにできることは気持ちを言葉にすることだと思った。

鉄ちゃんは帰り際、僕達の車に向かって

「遼くん、たまには釣りにも来てくれよ、絶対な！」

といつもの笑顔で手を振ってくれた。

独居老人の孤独が問題になっている。人々が老人に無関心なのだろうか、そうではない。かけられる言葉をかけないのだ。『大切な人だ』とか『尊敬している』と心で思っても口に出して言うことは難しい。照れくさいし場違いな気がするのだ。老人とは使う言葉も笑いや怒りの感覚も違うので、話せないような錯覚を持つ。しかし言葉の本質は同じではないのか。日本語を共有するこの日本の中で、一人暮らしの老人が熱中症で倒れても誰も気がつかないという現状が今の日本にはある。誰かが気持ちを言葉にしていれば助けられた命があるのではないだろうか。

受験勉強もあるけれど、頑張って鉄ちゃんと釣りをする時間をつくろう。そして、鉄ちゃんのルアーを海に向かって投げながら語らうのだ。僕に何の話ができるのか分からない。でも、男同士、釣り好き同士、分かりあえることはたくさんある。鉄ちゃんを一人ぼっちには絶対しない。